８　学校アクションプラン

令和７年度　富山中部高等学校アクションプラン　　－１－		
重点項目	学びを楽しみ自走する生徒の育成（学力の充実）	
重点課題	①　教育目標の実現のため、深い学びを目指した授業を行う。また、他教科と連携し、教科横断的な授業の開発に努める。 ②　定期考査を軸として、主体的に学習を進めることができるよう指導助言を行う。	
現状	①　授業力の向上を目指して互見授業等を行い、教科別授業研究会の充実に努めている。 ②　定期考査期間中の中日に休日が２日間、もしくは３日間の休日が今年度から入る。	
達成目標	①　授業力の向上を図るため、互見授業等を行ったり、教科別授業研究会を行ったりする。探究教育部と連携し、教科横断型授業の互見授業を行う。	②定期考査期間中の休日１日の自主学習の時間 平均１日　８時間以上 （２学期期末考査までの９日間）
方策	○互見授業を全教員に対し公開する。 ○積極的に他科目、他教科の授業を参観する。 ○教科横断型授業のための教材を、他教科と連携して開発する。 ○互見授業終了後、教科別授業研究会を開催する。 ○ＳＳＨの取組により開発した探究的な手法を普通教科の授業に導入する。 ○個々の学力や進度に応じた教材について、研究開発をさらに進める。	○担任や教科担当者による個別面接の充実を図り、定期考査の明確な目標を持たせる。 ○読解力・思考力・判断力・表現力等を育むような質の高い作問に努める。 ○定期考査に向けて、各教科より学習のポイントを提示する。 ○新入生合宿で高校での学習法をしっかり身につけさせる。
達成度	・各教科年間２回以上実施した。 ・教科横断型授業を実施した。 （地理×美術）など	・１学年平均８.１時間 ・２学年平均７.３時間 ・３学年平均７.６時間（全体平均７．７時間）
具体的な取組状況	《互見授業・教科別授業研究会》 ・１学期、２学期ともに各教科で授業研究を行った。授業実施後には、教科別の協議会や授業研究会を持ち、生徒の学力、学習実態について分析するとともに授業力向上に向けた指導法の検討を行った。	
	《自主的な学び》 １学年は高校の学習スタイルを確立させるとともに、自走できるような指導を心がけた。２学年は実力テスト後に解説授業を行い、自主的な学びにつながるようにした。また、長期休業中の課題に効率的・計画的に取り組めるように、計画表を長期休みの前後で提出させ、担任面接や教科面接で学習方法についてアドバイスを行った。３学年は難関大講座で、志望大学の問題に応じた問題傾向を説明することで自主的な学びにつながるようにした。また、進学模試終了後、解説授業を行い、自主学習の改善を促した。生徒の学力分析をふまえ、担任や教科担当による面接を行い、個々の現状に応じた助言をした。	
評価	A	《互見授業・教科別授業研究会》 ・互見授業を行い、授業改善につなげている。 ・教科横断型の教材の開発が進められた。
	B	《自主的な学び》 ・考査期間中の土日の学習時間は目標としていた８時間には及ばなかったが、考査に向けて各学年おおむね７時間以上の学習時間を確保した。
学校評議員の意見	《互見授業・教科別授業研究会》 ・互見授業は授業の質の向上に役立っている。 ・教科横断型授業は、単一教科では解決できない社会課題に向き合うために非常に有効である。	
	《自主的な学習計画》 ・入学当初からの指導により、自主学習をしなければならないという意識が育てられている。 ・主体的に学習できない生徒への対応も工夫する必要がある。	
次年度へ向けての課題	・今年度は生徒の自主学習時間の確保および教職員の働き方改革のため、定期考査の日程を見直し、土曜日の考査をなくした。新教育課程で科目数が増加している中で、授業時数を減らすことになったが、与えられた時間の中で生徒の学力を担保し、希望する進路の実現をはかるために、授業で扱う内容、課題の与え方、作問の工夫など実施してきた。今後もさらなる研究が必要となる。互見授業で実践を共有し、授業研究を行う機会は今後も設けていきたい。 ・教科横断型の授業は生徒にも好評であり、よい刺激になっている。次年度も計画し、実践していく予定である。	

評価基準　　A達成した　Bほぼ達成した　Cあまり達成しなかった　D達成しなかった

令和７年度　富山中部高等学校アクションプラン　　－２－		
重点項目	進路意識の高揚と進路希望の実現	
重 点 課 題	①　広い視野に立ち、自己の将来像に連なる明確な進路目標を見つけさせる。 ②　第一志望をあきらめず、難関大学への進学に向けて主体的に努力できる生徒を育む。	
現 状	①　全員が大学への進学を希望しているものの、視野が狭く、志望大学や志望動機が曖昧な生徒も見受けられる。 ②　進路が多様化する時代背景もあるせいか、ほどほどの目標で満足する生徒が増えてきている。	
達 成 目 標	自己の将来についてより広い視野に立って考えることができる生徒を育てる。	難関１０大学＋国公立大学医学科（以下難関大）への出願者および合格者の割合
	・進路関連のイベントを通して、様々な生き方や学問があることに気づかせ、自分の進路を描かせる。	①　３年在籍生徒数に対する難関大出願率65％以上 ②　３年在籍生徒数に対する難関大合格率35％以上
方 策	○２学年の７月に「アメリカ研修」、８月に「大学探訪」を行う。また、探究活動での講演会などを通じて視野を広げさせる。 ○１学年の生徒(および２学年の希望者)に対し進路講演会を行い、自己の将来像について具体的なイメージを持たせるとともに、進路に関する視野を広げさせる。	○進路に関する行事を通して高い進路意識を持たせる。 ○担任面接以外に教科面接を効果的に織り交ぜることで生徒を多面的にとらえ、教科指導につなげる。 ○第１志望への合格を実現させるために、教員全員の体制で添削指導や難関大講座などを展開し、生徒一人一人にきめ細かく支援する。
達成度	・「大学探訪」「アメリカ研修」とも、多くの生徒が刺激を受けたと答えている。	・出願率４９％（昨年５４％）、合格率は２９％（昨年２６％）であった。
具体的な取組状況	１学年 ・「企業施設研修」を１０月１７日（金）に１学年全員で実施し、（本年は県教委の「富山の魅力体験バスツアー」指定校に選出された。）職業観を育て就業を見据えた文理選択等に役立てた。 ・１０月４日（土）に社会の様々な分野で活躍されている方々を招いて「進路講演会」を実施した。 ・４月に「ビジネスアイデア」についての講演会を、５月に「国際関係」について英語の講演会を、１２月には外国人研究者を招き「サイエンスと異文化理解」について英語で講演会を実施した。	
	２学年 ・７月にアメリカ研修を実施した。男子１６名、女子２３名の計３９名が参加した。 ・８月に大学探訪を実施（１８２名参加）した。東大生との懇談は生徒の意欲を大いに高めた。実際にキャンパスを歩き、模擬授業を受けたことは良い経験となった。 ・３月１７日に大学生や今年受験を終えた卒業生を招いて「卒業生に学ぶ会」を予定している。	
	３学年 ・高い志望を掲げ、授業を大切にし、粘り強い学習を行うように、担任の面接や学年集会における生徒への日々の働きかけの中で繰り返し呼びかけた。 ・定期考査や進学模試を通じて、ＰＤＣＡサイクルでの学習を指導している。 ・全教科にわたって、受験まで個別添削指導を行っている。	
評 価	A	・生徒事後アンケートでは、進路講演会では、「大変満足できた」「満足できた」が９０％以上、大学探訪では、満足度４以上（５段階評価）が９０％以上と高評価だった。 ・アメリカ研修では、ホームステイ、スタンフォード大学等の見学、シリコンバレーの施設見学など、生徒の視野を広げるメニューが充実しており、生徒は大いに刺激を受けていた。
	D	・難関大の出願率は４９％（昨年５４％）と、ここ数年で最も低い。合格率は２９％と例年より合格率は高く（昨年２６％）、学級減にもかかわらず合格実数も例年と同水準であった。
学校評議の意見	《大学探訪・進路講演会》 ・大学探訪等の行事は、「あこがれ」を「現実の目標」に変えるマインドセットの醸成につながる。 ・行事が多すぎて、生徒が「こなすだけ」になっているならば、活動を絞り込むことも必要。	
	《進路の実現》 ・正解のない時代だからこそ、「自己納得」できる進路を最優先に考えるべきである。 ・安全志向の生徒が増えている中、強い信念を持って生徒に接することが難関大学合格につながる。	
次年度へ向けての課題	《進路講演会》《大学探訪》《アメリカ研修》 ・各行事の満足度は高い。その一方、多様化する社会に対応するうえでも、行事がマンネリ化しないように、高大連携、企業連携、教科横断等を意識しながらマイナーチェンジを行っていく必要がある。	
	《進路の実現》 ・生徒の進路希望が多様化し、難関大を目指す意味も変化する中での進路指導が求められる。	

評価基準　　A達成した　Bほぼ達成した　Cあまり達成しなかった　D達成しなかった

令和７年度　富山中部高等学校アクションプラン　　－３－		
重点項目	読書指導・体力の向上	
重 点 課 題	①読書指導を充実させ、図書館及び図書の利活用を促進する。 ②体力の向上に努めさせる。	
現 状	①探究活動や授業、進路研究などで資料や情報を収集し利用する機会が増えている。しかし、日常的に生徒が図書資料を検索するまでに至らず、図書資料を利用しているとはいえない。 ②体力の低下が危惧される生徒が増えてきている。	
達 成 目 標	①レファレンス（資料や情報を求める人への支援）を利用した数	②２年次において、持久走の自己最高記録を更新した生徒の割合
	１８０人以上	７０％以上
方 策	○蔵書検索システムをオリエンテーションや読書の時間や広報で生徒に周知し、主体的に活用できるよう支援する。 ○探究的な学習活動や授業、生徒の進路研究等と連携し資料や情報の提供を適宜おこなう。 ○紙媒体に加えてGoogleクラスルームも活用し、より伝わりやすい情報発信をめざす。	○全学年、体育の授業時に、毎時１０分間程度のサーキットトレーニングを実施する。 ○前年度の自己記録を参考に今年度の自己目標を明確にし、体育の授業や部活動などで意欲的なトレーニングに結びつける。
達成度	・レファレンス(資料や情報を求める人への支援)を利用した数　　１８７人	・２年次において、持久走の自己最高記録を更新した生徒の割合　８４％
具体的な 取組状況	《読書・広報活動》 ・年度初めの読書の時間で蔵書検索システムの使用法を周知、体験する時間をとった。 ・各学期に１回以上は、読書体験のきっかけ作りとして、オリエンテーションやビブリオバトルなどを図書館で実施し、レファレンスしやすい環境作りを行った。 ・資料や情報を求めるレファレンスの内訳は司書や司書教諭との対面によるものが１４６件、蔵書検索機能を使ったものが４１件あった。 ・授業や課題等で利用したい書籍を、富山県立図書館から８１冊（生徒６４冊、職員１７冊）借り出した。 ・７月に１年生各クラスで高志の国文学館訪問を実施し、富山県ゆかりの作家や作品、特別企画展「アニメ監督×万博プロデューサー　河森正治展」を鑑賞した。	
	《体力の向上》 ・サーキットトレーニングの意義について理解させ、トレーニング効果が上がるように実施した。	
評 価	A	《読書・広報活動》 ・外部施設との連携により適切なレファレンスができ、図書や資料、情報の提供をおこなうことができた。
	A	《体力の向上》 ・継続して行ってきたことで、トレーニング効果が上がっていることを自覚することができ意欲的に取り組むことができた。
学校評議員の意見	《読書・広報活動》 ・読書の時間は、単なる情報収集ではなく、デジタルから離れて静寂の中で自分と向き合う時間と位置づけてはどうか。 ・小泉八雲の蔵書など、地域の教養資源に興味を持つ余裕も大切にしてほしい。	
	《体力の向上》 ・入学当初はサーキットのきつさに苦しんでも、学年が上がるにつれて慣れてくる子が多いと聞く。この体力づくりが日々の健康や、受験時の健康管理につながっている。 ・健康管理能力の育成は、生涯にわたる大切な課題である。	
次年度に向けての課題	《読書・広報活動》 ・今年度に引き続き、図書館の情報が生徒に「伝わる」ため情報発信のデジタル化をすすめる。 ・図書館活用の方法や必要な資料・情報へたどりつく方法のガイダンスを行い、自ら学び考える支援をする。	
	《体力の向上》 ・自己の体力、課題を把握し、積極的に取り組む姿勢の育成をはかる。 ・各自の体力に応じて、運動負荷の強度を設定する。	

評価基準　　A達成した　Bほぼ達成した　Cあまり達成しなかった　　D達成しなかった

<table>
<tr><td colspan="4">令和７年度　富山中部高等学校アクションプラン　　－４－</td></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="3">学校行事・部活動の充実</td></tr>
<tr><td>重 点
課 題</td><td colspan="3">①学校行事（競技大会、体育大会、文化祭、コーラスコンクール）を充実させる。
②部活動をより充実させる。</td></tr>
<tr><td>現 状</td><td colspan="3">①各行事において、生徒会が中心となって企画・運営を行っている。学校行事を成功するかどうかは、生徒会やリーダーの指導と、それ以外の多くの生徒の協力にかかっている。全体的にみると盛り上がりを見せても、一定数そこに気持ちが向いていない生徒も見られる。
②部活動には多くの生徒が所属し、意欲的に活動している。それぞれ自己実現や人間的な成長のため、学習と部活動を両立させようと努力している。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達 成
目 標</td><td colspan="2">学校行事が充実していると感じる生徒の割合
・各行事後に多角的に見たアンケートを行い、生徒目線の充実度・満足度をはかる</td><td>②部活動に充実感を得た生徒の割合
・１、２年生部活動加入者を対象にした、２学期終了時のアンケート</td></tr>
<tr><td colspan="2">８０％</td><td>７０％以上</td></tr>
<tr><td>方　策</td><td colspan="2">○どんな場面に充実感や満足感を持っているのかを評価するとともに、充実感や満足感の低い場面や行事全体の課題点を修正していく。
○全校生徒が自ら学校行事に主体的に取り組み、行事ごとに生徒自身に人間的成長がみられ、学校全体にいい影響を与える行事づくりを目指す。</td><td>○ 部活動が自律的な学びの場として機能するよう、生徒の主体的な活動を尊重する。
○ 限られた時間の中での、効率的な練習や活動を普段から考えさせる。
○ 個々の生徒が、学習と部活動のバランスを取りながら活動できるよう、ホーム担任と部顧問が連携を取って指導する。</td></tr>
<tr><td>達成度</td><td colspan="2">達成できた。行事後のアンケートでは９０％以上の生徒が行事に満足している。</td><td>達成できた。８０％以上の生徒が部活動に充実感を持って活動している。</td></tr>
<tr><td>具体的な
取組状況</td><td colspan="3">《学校行事》
・行事終了後に、全生徒にアンケートを実施。
・自分がどのような役割を果たせたか、関われたかについて評価。
《部活動》
・部活動の活動時間の確保に努めたり、環境の整備に取り組んだり、活動場所については有意義な活用方法などを生徒同士で意見交換を行いながら活動した。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">評 価</td><td>A</td><td colspan="2">《学校行事》
・主体的に取り組む生徒が多い。集団の一員として行事に関わることに満足度が高い。</td></tr>
<tr><td>A</td><td colspan="2">《部活動》
・各部の目標を見据え、学習と部活動の両立を考えながら部活動を行った。運動部学芸部とも全国大会・北信越大会で、好成績を収めた生徒が多かった。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">学校評議
員の意見</td><td colspan="3">《学校行事》
・クラスや団が一丸となってひとつの目標に向かう姿に青春を感じる。
・意見の対立や失敗を経験しそこからリカバリーする力をつけた生徒こそ、社会が求める人材である。</td></tr>
<tr><td colspan="3">《部活動》
・昔ながらの精神論ではなく、科学的な根拠に基づく活動が今は主流である。
・生徒主体の運営は、社会における「プロジェクトマネジメント」や「タイムマネジメント」の予行演習として非常に有効である。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">次年度へ
向けての
課題</td><td colspan="3">《学校行事》
・単に楽しい学校行事、から、その関わりの中で、集団が、個々が成長できるような行事にしていく。</td></tr>
<tr><td colspan="3">《部活動》
・部活動において成績や結果を残していくことを目指しながら、そのために生徒があいさつ・礼儀を正したり、視野を広くしたり試行錯誤したりするなどの経験を繰り返しながら人間的に成長することを期待するとともに、あらゆる知識と経験を積めるようにしていく。</td></tr>
</table>

評価基準　　A達成した　Bほぼ達成した　Cあまり達成しなかった　　D達成しなかった

令和７年度　富山中部高等学校アクションプラン　　－５－			
重点項目	学校教育全体を通じた「探究力」の伸長		
重 点 課 題	①外部と連携した課題研究を充実させる。 ②教科横断型授業「中部アカデミックス」を実施する。 ③データサイエンス（ＤＳ）に関する授業を実施する。		
現 状	①県庁や様々な企業と連携しながら課題研究を行ってきたが、継続的な取組になっていない。 ②これまでに６種類の教科横断型授業が行われた。（国語、世界史、地理、化学、美術、英語） ③探究科目において、情報技術に関する授業を実施している。		
達 成 目 標	①継続的に外部人材と連携しながら、課題研究を行う。	②複数の教科で教科横断型授業「中部アカデミックス」を実施する。	③１年DS探究（基礎）、２年DS探究（応用）、３年DS探究（発展）の授業計画を作成し実施する。
方　策	○テーマ選びから外部人材に関わってもらう。 ○検証方法や考察の段階で指導助言をもらう計画を立てる。	○教科横断型授業に適する単元のマッチングリストを作成する。 ○教科横断型授業の指導案を作成する。	○専門家の助言の下、データサイエンスに関する授業計画を立てる。 ○特別授業等を利用して実施し、効果を検証する。
達成度	・３７班のうち１５班が外部と関わりながら探究活動を行った。	・１学期に２件、２学期に２件実施した。	・ＤＳ探究（基礎）の授業計画を作成し、実施した。 ・生成ＡＩの導入教材を作成した。
具体的な取組状況	《外部連携》２年普通科課題研究　「ＳＳ探究Ⅱ」 ・本校に来てご指導いただいた　４事業所 ・生徒が訪問したり、電話したりしてご指導いただいた　約８事業所		
	《中部アカデミックス》 ・英語×世界史１件、地理総合×美術１件、美術×化学２件、美術×世界史１件が行われた。 ・教科ごとのマッチングリストを作成した。		
	《データサイエンス》 ・３時間でデータ収集や分析手法などを学ぶためのワークシートを作成した。 ・教員向けの生成ＡＩ活用のための研修会を開催した。		
評 価	B	《外部連携》 ・複数の企業の方から話を聞きながら、課題研究をすることで、内容が深まった。 ・積極的に外部機関を訪問する生徒が増えてきた。	
	B	《中部アカデミックス》 ・５件の教科横断型授業が行われた。 ・マッチングリストを作成したことで、他教科の要望がわかった。	
	B	《データサイエンス》 ・１年次「ＤＳ探究（基礎）」の授業計画とワークシートを改善することができた。 ・生成ＡＩの利用について、その危険性も含めて指導する準備ができた。	
学校評議員の意見	《外部連携》 ・教員や生徒の負担になって、「こなし仕事」になってしまっては本末転倒である。スクラップ＆ビルドで、総量を調整する必要がある。		
	《教科横断型授業》・アクションプラン１の欄に記載。		
	《データサイエンス・生成AI》 ・データサイエンスや生成AIへのスピード感ある対応は素晴らしい。 ・生成AIはこれからの時代「使わない」はない。ルールを定め、十分な指導の下、活用することは有意義だと思う。 ・先生方の業務改善にも役立てていければよい。		
次年度へ向けての課題	《外部連携》 ・年間を通して、継続的に連携できる班を増やす。 ・すべての班が外部と関わるようにする。		
	《中部アカデミックス》 ・学習指導案を作成し、蓄積する。デジタルアーカイブの作成。 ・継続的に実施する雰囲気を高める。		
	《データサイエンス》 ・２年次「ＤＳ探究（応用）」と３年次「ＤＳ探究（発展）」の指導計画を作成する。 ・１年次「ＤＳ探究（基礎）」のワークシートをさらに改善する。		

評価基準　　A達成した　Bほぼ達成した　Cあまり達成しなかった　D達成しなかった